

船渠をほどき、

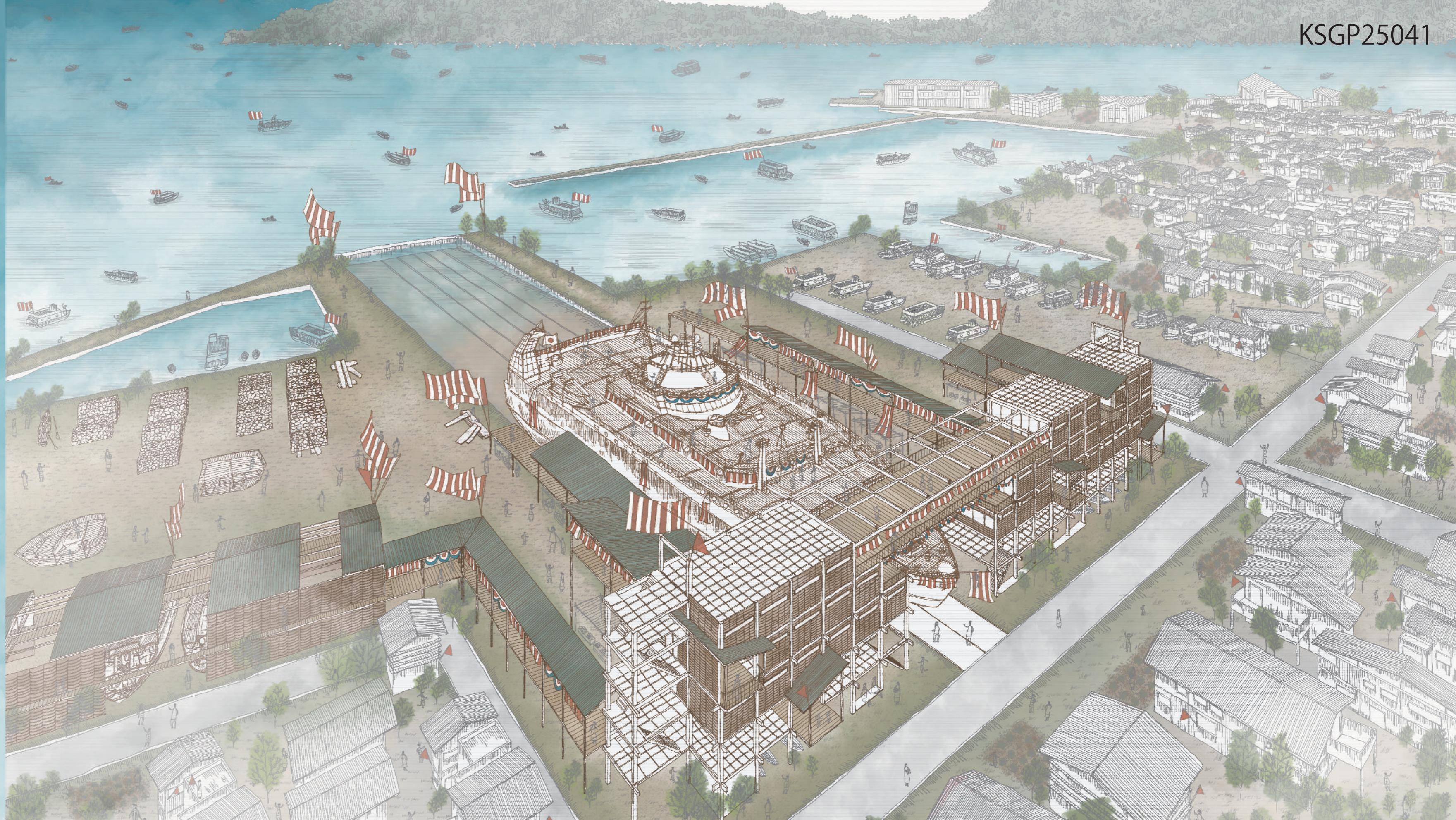
海をむすぶ

新山本造船所跡の解築による
まち固有風景の遺し方

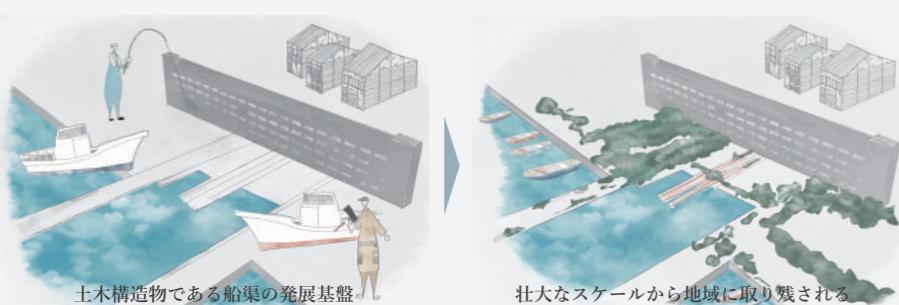
みんなの原っぱを考えたとき、
種崎には海があった。

かつて人々は、土地と密着して生業や文化を発展することで、まち固有の風景を築いてきた。しかし、街並みの画一化による人々と土地の乖離からその土地に暮らしている意味は失われつつある。その土地に根ざす風景や基盤を再解釈し、変化を受け入れながら復原していくことが解築時代にとって重要なテーマだと考える。

本提案では、種崎造船の船渠風景をほどき、かつて人々が海と築いた景観と営みを再解釈し、まち固有の風景の遺し方を再編する。

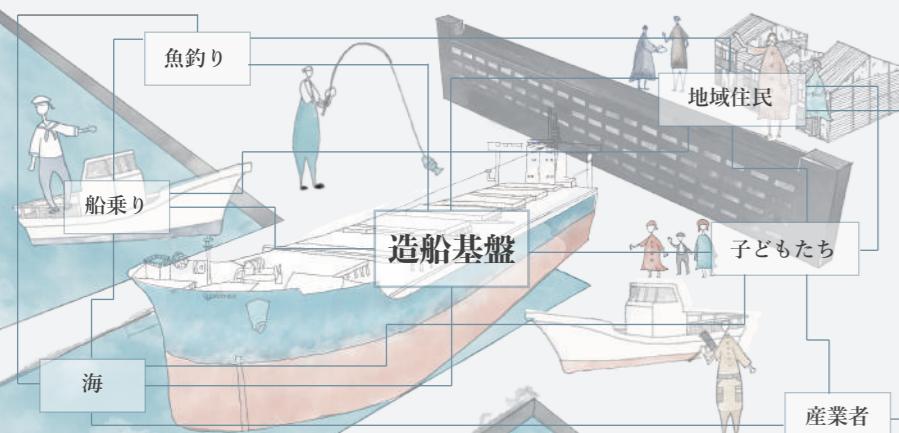


01-a: 社会背景 / まち固有風景の行方



地場産業は、まちの歴史や風景を内包するその地域ならではの空間資源である。しかし、日本では、産業衰退により生み出された余剰空間を解体し新たに建て直すこと、他の地域と変わらない街並みに画一化してきた。本来、余剰空間は、現代の風化されていく街並みによっては、**地場の固有性を見出すための重要なボンヤク**を秘めた一つの空間資源であると考えた。

01-b: 解き築く時代にとって建築にできること



解き、築く時代にとって建築にできること。それは、まちの発展とともに紡いできた発展基盤が余剰空間として取り残されてしまい、その土地に根ざす歴史や風景を現代に再解釈し、頼りの空間資源を受け入れながら更新・継承していく、寛容的で創造的な遺し方が必要だと考えた。

02-a: 計画敷地 / 高知県高知市種崎 新山本造船所跡地



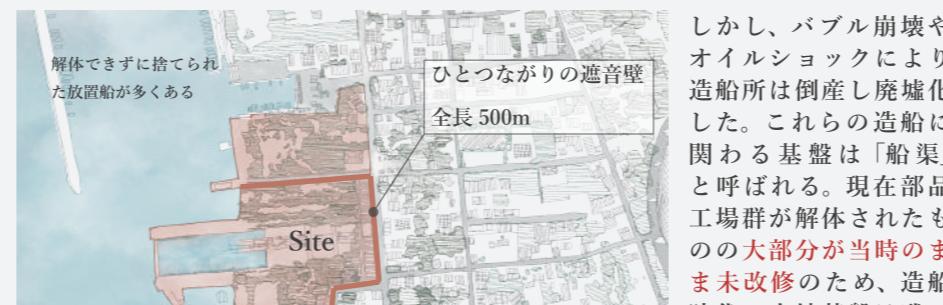
敷地は高知県高知市種崎の新山本造船所跡地。高知市は、海の玄関口であったことや全国一位の降水量など、豊かな自然環境や海と密接な関係を持った土地である。中でも種崎は、浦戸湾沿い全島を人工地として埋め立て、造船のまちとして造られた地歴がある。敷地の新山本造船所は、種崎の発展に直結した日本最大の造船所であった。

02-b: 計画敷地 / 街と海を分断する 13m の遮音壁



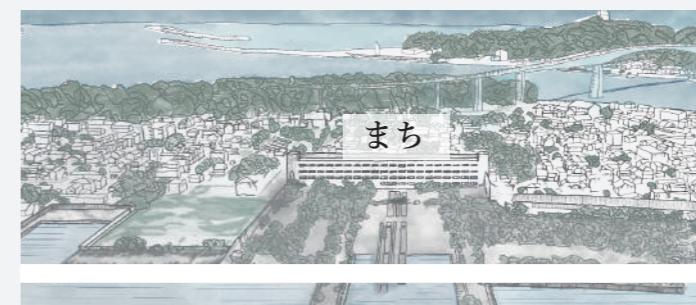
その反面、造船時の騒音対策として 13m の遮音壁を造船所とまちの境に建設したこと、まちと海が分断され住宅地から浦戸湾は見えなくなってしまった。

02-c: 計画敷地 / 造船土地構造の「船渠」に着目

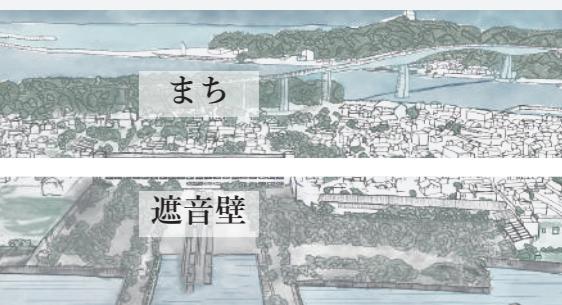


しかし、バブル崩壊やオイルショックにより造船所は倒産し廃墟化した。これらの造船は「船渠」と呼ばれる。現在、部品工場群が解体されたものの大部分が当時のまま未改修のため、造船時代の土地基盤は残っている。また、産業に特化したため、まちの防災施設整備が整っていない現状がある。

03-b: 提案 / 船渠風景を段階的にほどくことで海を穏やかにつなぐ



船渠を分析すると、まちと遮音壁、遮音壁とドック、ドックと海の三構成から固有風景が構築されていた。そこで、三構成を段階的に計画していくことで、**地場を内包する船渠を介して、人とまち、人と人、人と海を穏やかにつないでいく**。



まち 遮音壁 ドック 海

03-a: 提案 / 船の解体場として利用する



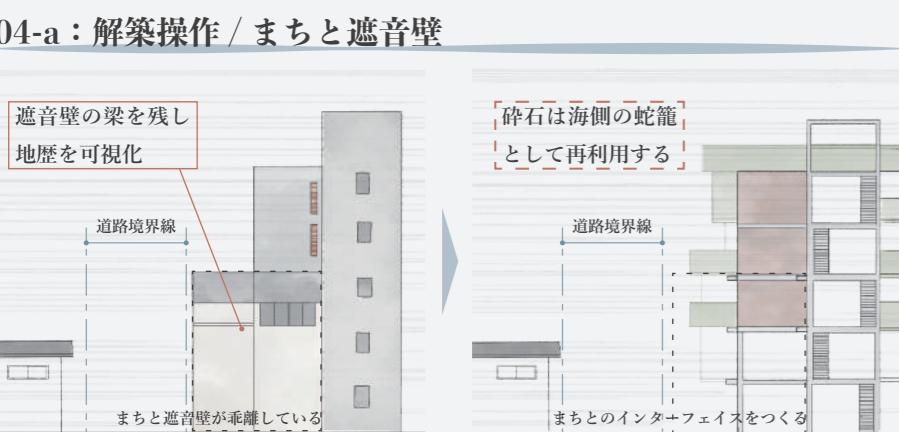
そこで、かつての造船風景を再興するため船渠に着目した。今まで船を進水させてきた基盤から寿命を迎えた船が帰ってくるための解体場として再編する。**まち固有の船渠を解体資源として利用しながら、災害時には防災拠点になることで、かつての船渠を現代でも実際に利用しながら継承することができます**と考えた。

03-c: 提案 / 地域に根づく工法と文化で長期的に遺していく



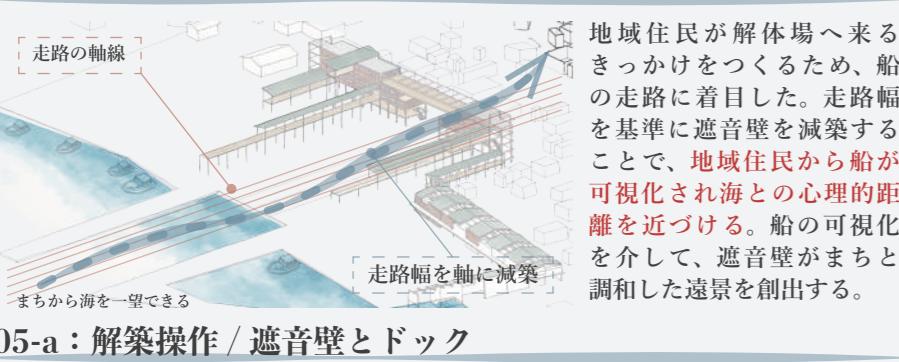
多くの種崎には、水から守るために江戸から続く街路市の文化が現在も根強く残っている。そこで、まちの工法文化を組み込む解体場として**地域住民も利用できるよう開くことで、地域と産業の兼ね合の取れたみんなの場として種崎の固有風景を長期的に遺すことができる**と考えた。

04-a: 解築操作 / まちと遮音壁



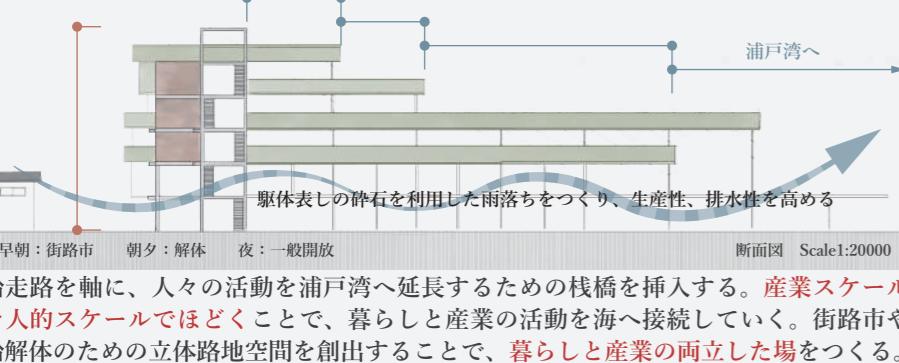
13m の遮音壁は、浦戸湾を隠し住宅街に圧迫感を生み出している。そこで、津波想定範囲の一階まで立体表しとし、遮音壁の増築背景を残すことで住民と地歴を繋ぐ。

04-b: 解築操作 / まちと海をつなぐ船の接続口



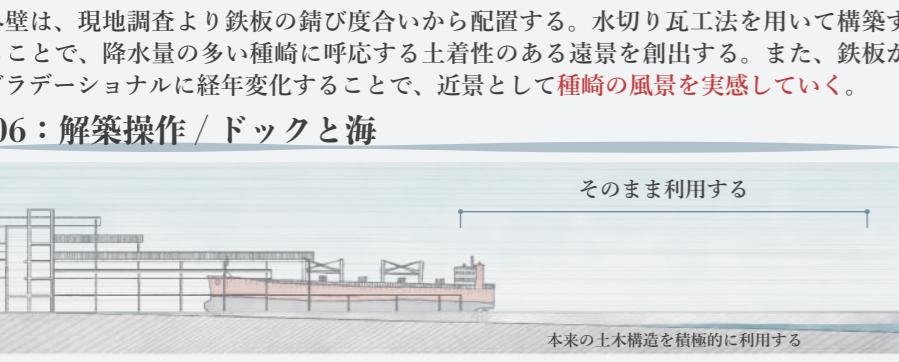
既存の船渠を軸に、人々の活動を浦戸湾へ延長するための接続口をつくる。船渠の接続口を標準化することで、地域住民から船が可視化され、海との心理的距離を近づける。船の可視化を介して、遮音壁がまちと調和した遠景を創出する。

05-a: 解築操作 / 遮音壁とドック



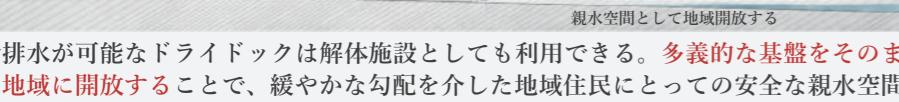
外壁は現地調査より鉄板の錆び度合いから配置する。水切り瓦工法を用いて構築することで、降水量の多い種崎に呼応する上塗性のある遠景を創出する。また、鉄板がグラデーション的に経年変化することで、近景として**種崎の風景を実感していく**。

05-b: 解築操作 / 鉄板のテクスチャと構成



外壁は現地調査より鉄板の錆び度合いから配置する。水切り瓦工法を用いて構築することで、降水量の多い種崎に呼応する上塗性のある遠景を創出する。また、鉄板がグラデーション的に経年変化することで、近景として**種崎の風景を実感していく**。

06: 解築操作 / ドックと海



そのまま利用する 本来の土木構造を積極的に利用する 多目的的な場となる 拡張できる余白 親水空間として地域開放する

給排水が可能なドライドックは解体施設としても利用できる。**多目的的な基盤をそのまま地域に開放することで、綴やかな勾配を介した地域住民にとっての安全な親水空間となる**。また、船車や作業時に合わせて橋脚を拡張していくための余白となる。

船渠再編から生まれる循環サイクル

